
無垢なる憎悪 汚れた正義

temso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無垢なる憎悪 汚れた正義

【Nコード】

N2316A

【作者名】

temso

【あらすじ】

互いが互いを憎み合う戦争のさなか。ウェルス国の士官、シャウラは敵国の少年と出会う。彼はシャウラを、ウェルスを憎んでいた。戦争とは、なにか。語るシャウラに、少年は少しずつ変わっていく。

ブローグ

「病、だつて？」

彼は目の前に横たわる人物を見下ろして、隣の母親に尋ねた。

「父さん、突然、苦しみだしてね。薬を飲ませてあげても、ダメだった。医者もこの辺にはもういなくて」

疲れきつたような声で、母は言う。

「本当、残念だよ。息子が軍の少尉にまでなれた、っていうのに」

「……」

「お前の晴れ姿を、見せてあげたかった」

「え……」

強い違和感を感じる。

待つてくれ。

なら、俺は何のために軍に入った？

「……少尉？」

心配そうな声がかかる。彼は振り向いた。

どこか冷たい目つきの、赤毛の青年。かけられた声の通り、少尉の階級章を着けている。

名を、シャウラといった。

「どうしました？ 考え事ですか」

そう言いながらテントの中に入ってきたのは、彼より一回りも年上の下士官だった。

「ドーグ曹長……。いや、別に」

「そうですか」

人の良さそうな顔を笑顔の形にして、ドーグはシャウラの正面の椅子に腰掛けた。

この曹長は、このかなり年下の上官にも不服を唱えることがない。
「遅れてた物資、届きました。ニツキーの奴が走り回ってましたよ」

「そうか」

冷たい目は変わらないまま、シャウラは答える。

「剣が三十、槍が三十、確かに。後は兵糧です」

「破損した分を取り替えて、後は武器庫に保管。いつも通りだ」

「分かりました」

席を立つ。

「曹長」

テントを出ようとした背中に、声がかかった。

「なんです？」

ドーグは人のいい顔を向けた。冷たい目と、視線が合う。

「……この戦争が終わったら、どうする？」

「そうですね……」

少し考える。そして、首をひねった。

「……なんでですかね。なんか、思いつかないんです」

「俺もなんだ。戦争が終わったら、どうなるのか」

「戦争に勝てばすべてが良くなるって、ガキの頃から周りは言っていましたけど。いざ冷静に考えてみれば、それが本当なのかどうか誰にも分からない」

滑稽な話だ。何のために自分達が戦っているのか、本当は分かっ

ていないのだから。

自嘲に近い笑みを浮かべて、シャウラは席を立った。

「なんにしても、皆で生きたまま帰りたい。だから、考えるのは明後日でいい」

ずつとこうやって、結論を先延ばしにしてきた。

それが、いつまで続くのか。

「歩哨を見回りに行く。一緒に来てくれ」

ウェルス王国軍、第一北伐軍第二大隊隊長、シャウラ・レイゼ。

敵方からは『赤毛の悪魔』と呼ばれるほど、その戦果は際立っている。

いかなる事態にも冷静に対処し、決して隙を見せず、時に非情とも言えるほどの戦術を取って確実に戦場で勝ちを拾う。特に野戦においてすさまじい豪胆さと冷静さを発揮する。

一度など、敵の半分以下の兵力で散々に敵を追散らしたことがある。

剣の腕も確かだ。模擬剣を使用しての訓練でも、負けた事は数回しかない。

『天才』と称される所以である。

しかし、彼はどんな賞賛を受けても喜びはしなかった。そんなものはどうでもいいのだ。

戦争に勝てさえすればいい。そうすればすべてが良くなるのだから。

今までずっと、そう思い続けてきたのだが。

プロローグ（後書き）

この作品は春野天使さんから頂いたネタを元にして書いたものです。
貴重なネタをくださった春野さん、本当にありがとうございます！
実は、初めての真面目作品なのです。
酷評でもいただけたら幸いです。

戦争が続いていた。

いつ終わるとも知れない戦争が。

ある者は両親を殺され。ある者は村を焼かれ。

そうしていつしか、戦争の原因や行く末など齒牙にもかけない者たちが増えていった。

敵を憎み、敵を恐れ、敵を殺す。

どちらの国の人間も、これを当然と考えるようになった。

そして、こんな状態が続いたまま三十年もの月日が経過した。

戦況は膠着していた。

敵国のレーゼル帝国は、一時は国境を越えウェルス国内に侵攻し、城郭を三つ落とした。

だがウェルス軍に兵站をかき乱され、十万にものぼる大軍を維持できなくなり、後退を余儀無くされた。それに乗じてウェルスは押し返し、現在はもとあった国境から少しの所に陣営を張っている。

シャウラはその陣営の中の一部千五百の兵を任されていた。

この千五百は精鋭だった。特に、騎馬兵六百は歩兵五千にも匹敵すると言われる。

シャウラはその千五百を率いて敵国を進行しているところだった。

任務は先遣隊の救援。敵地で予想を超える抵抗にあっているという事らしい。

異変が起きたのは、情報の戦地まであと二日というところだった。

「夜襲」

「それほど大規模なものではありません。死者はなし。軽傷者が五、重症が二。

騎馬が三。兵糧に火をかけられましたが、すぐに消し止めたので被害は軽微です」

矢継ぎ早に報告する兵士の鎧の金属部分が、かがり火に照らされて赤く光っていた。

「他には」

いつもと変わらない調子で、シャウラは淡々と言う。

「被害は以上です。犯人を五名捕らえてあります。抵抗者は斬りました。逃げた者は現在追跡中です」

「捕らえた者はそのまま捕虜に。逃げた者を追う必要はない」

「分かりました」

伝令が走り去っていく。

「……市井のものですか」

「おそらくは」

正規軍のかける夜襲とは違う。広域的にウェルス軍が進攻している今、小規模な奇襲は効果が薄い。考えられるとすれば侵攻してきた他国の軍を、自らの手で守ろうとした勇気ある市民の手によるものだ。

ドーグはすこし疲れたような顔で苦笑してみせた。

「この国の人間にしてみれば、俺達は悪魔の使いか何かに見えるんでしょうね」

「だろうな」

こういう事態にあるときのシャウラは、決して揺るがない。

「それでいい。少し前までは向こうも同じ悪魔だった」

「……？」

この少尉が、こんなことを言うとは珍しい。

いつもなら静かに指示を出すだけなのだ。

と、シャウラがすつと手を剣の柄に掛けた。

「少尉！」

ドーグは叫んだ。

テントの陰から、こちらに向かってくる人間の姿。右手に刃を携えて。

夜の闇に、銀光がきらめく。

鋭い金属音が響く。

がっちりと、二つの刃がかみ合った。

「……あちらは囃か」

「クソっ……！」

歯噛みして剣を握る手に力を込めたのは、まだ二十歳にも届かないような少年だった。

「お前がっ……！お前が！」

鬼のような形相で、力任せに剣を押し付けてくる。

「少尉！」

ドーグが剣を抜こうとするが、

「いい。下がっていてくれ」

振り向きもせず、部下に向けて言う。口調はまるで変わっていない。

膂力でも技量でも、この少年はシャウラに敵うべくもないのだ。

押してくる力を利用して、剣先を脇に逸らしてやる。

バランスを崩したところで、剣を叩き落した。

喉元に切っ先を突きつける。少年は、憎悪と少しの恐怖のこもった眼差しをシャウラに向け続けていた。

「……この国の者だな」

「お前等が先月潰した町のもんだ……！」

「勘違いだ」

相変わらず冷たい目で、シャウラは言い放った。

間違いではない。先月、彼はまだ王都にいたのだから。ルートから言って、やったのは件の先遣隊なのだろう。

「うるせえ……！畜生が！」

少年はなおも悪罵を投げつける。そこに騒ぎを聞きつけた兵が駆けつけてきた。

「捕らえておいてくれ」

兵士が両脇から少年を取り押さえると、シャウラは剣を下ろした。

野営のテント群から少し離れたところに、襲撃犯の六名が繋がれていた。

シャウラに斬りかかった少年もいる。

かがり火は遠く、このあたりは真っ暗だ。誰も口をきかない。恨みと、悔しさと、これからの自分達の行く末に対する恐怖。これだけが彼らの心を支配していた。

平地に野営を張っているため、そばにあった木に両手を縛られた状態で繋がれている。

しばらく経って、人の近づいてくる気配。そちらを向くと、一人の兵が立っていた。

暗くて、顔は見えない。

「バカやったな」

ほんの少し哀れむような、そんな声で影は言った。

「……………」

「うちの隊長からのお達しだ」

「…………好きなようにしろ。けだものめ……………」

一人が、疲れ切ったような声で言った。すると兵士は肩をすくめて見せる。

「話は最後まで聞けって」

「いいんですか」

「何が」

「恭順を示したものは即刻解放する、なんて。本国のお偉いさんが聞いたら」

「わかつてる」

シャウラは遮るように言った。

こういう場合、襲撃者の首は撥ねるのが当然の措置のはずだった。進軍中に捕虜を抱え込む余裕などありはしない。

「俺の責任でやったことだから、皆にお咎めはないだろうさ」

ドーグの言葉に、彼はうつむいて言った。

そこへ、兵の一人が駆け寄ってくる。

「少尉」

「どうした？」

「命令どおり捕虜を解放したんですが、うちの一人が拘束解いたとたん再び暴れだしまして」

「それで」

「もう一度縛り付けてあります。どうします」

この質問も、他の部隊ではありえないものだ。聞くまでもなく、斬り捨てるのが常識なのだから。

「……俺が行くよ。曹長、後は頼む」

「わかりました」

シャウラは兵を伴って歩き始めた。

やっぱりな。

暴れたという捕虜を見て、シャウラはそうとだけ思った。自分に斬りかかってきたあの少年だった。

少年はうなだれたまま、地面に座り込んでいる。顔にアザが出来ていた。

近づいていくと、彼は顔を上げた。

「縄を解いたとたん、うちの兵に飛び掛ったそうだな」

「……てめえか」

先程と変わらない、憎悪のこもった声で言う。

「一応でもこちらに従うフリをしておけ」

「……嫌だ」

それだけは嫌だ。

「どうせ殺されたって同じだ！帰るところはお前らのせいでもないんだからな！」

だから絶対に、けだものに膝を折るような真似はしない。

他の奴らと同じように、敵に媚びて生き残るような真似をしても意味がない。

「民は、殺せない」

「嘘を付くな！」

唾を飛ばして叫ぶ。敵の言うことなど、信じられるわけがない。

「ならなんでここへ来た！？人を殺しに来たんだろ！？」

「……………」

シャウラは黙って、少年の顔を見た。

間違いはない。自分達は、この国の者を殺しに来たのだ。

少し前まで、それを疑問に思ったことなどなかった。

戦争に勝つため、多くの人間を殺してきたのだから。

「何とか言え！悪魔が！」

少年は叫ぶ。その目を、シャウラは以前にも見たことがある。

あれは一年ほど前、ウェルスがレーゼルに攻め込まれていた時の

事だ。

シャウラは襲撃にあつた町の救済に当たっていた。

敵軍はその町を徹底的に破壊し、奪えるものは奪い、女なども犯した上で殺した。子供もだ。生き残ったものはわずかだった。

そんな悲惨な状況の中生き残っていたある少年は、シャウラにこう繰り返した。

『俺を軍に入れてくれ』と。レーザーの悪魔を退治してやる、とこの敵国の少年も、それとまったく同じだ。頭の中にあるのはただ、殺してやるという憎悪の念だけ。それは一面、純粹である。

以前の自分は、それも仕方のない犠牲だと考えていた。戦争には必ず付いてまわるもの。

「どうしたいんだよ！てめえは！」

「……………」

わからない。

今のシャウラは矛盾だらけの人間だった。

「とにかく、お前を殺す気はない」

変わらない冷たい声で言う。

「なんで…………！」

「俺が軍に入ったのは、お前ぐらいの年の時だった」

「…………？」

シャウラは少年に背を向けて地面に座り込んだ。

「十年以上も前の話だ。その頃はまだ、今ほど激しい戦闘は少なかった」

戦線が動くことが少なく、小競り合いが続く程度のもだったけど、いつか大きな戦闘が始まるという不安がどちらの国の人々にも付きまとっていた。

「そういう状態に慣れていたが、不安はいつもあった。だから軍に入った。俺が戦争を終わらせてやる、ってな」

戦争に勝てばすべてが良くなる。ずっとそう教えられてきた。それでも時々、両親は不安をもらす。このまま戦争が続いて、大

丈夫だろうか、と。

志願して兵卒になり、厳しい訓練にも黙々と耐えた。

実戦にも幾度となく駆り出された。その度に死にそうな目にあい、それでもシャウラは生き延びた。その頃から兵の指揮を任されることが多くなった。

そして実力を認められ、彼は尉官に昇格した。ほんの一年前の話だ。

「数え切れないほどの敵を殺してきた」

シャウラは淡々と語る。

「敵は、敵だった。やらなければ、やられる。だから誰もが死に物狂いで剣や槍を振り回した」

それは、ある意味で病んでいる。他国の人間と言っただけで疑心暗鬼に陥るのだから。

「……あんたもか」

「俺達だけじゃない」

静かに首を横に振る。

「知ってるか？襲撃にあった町の生き残りの子供が、敵の首を取ったんだって喜んでたんだ。うれしそうに、敵兵の生首ぶら下げてな」

「……………」

たったの数年で何かがおかしくなっていた。国内は結束したが、それと同時に今まで当たり前だと思っていたものがことごとく崩れ去った。

敵を殺せば誉められる。戦で死ねば讃えられる。

子供にも憎しみが植え付けられた。

シャウラは別段、それを異常だとは思わなかった。

戦争に勝つ。そのためなら、これは当たり前のことだ。兵の一人ひとりに戦争で死ぬ覚悟がなければ、生き残り、勝ち残ることなどできない。敵の邪悪さを知らない子供が、将来の兵として役に立つ

はずがない。

「お前も、そう教わってきたんじゃないのか」

「そうだ……」

ウエルスは悪魔。レーゼルの地を侵略し、殺戮の限りを尽くす死神。

「違うのか……！」

現実にはウエルスは、いくつもの城郭を落とした。殺した人間の数も半端ではないだろう。

だがそれはどちらも同じなのだ。それが分かっているながら、誰も気に留めることは無い。

そしてまた、それを異常だと思う者もない。

それが現状だった。

「いや、違うじゃない」

シャウラは首を振った。自分の選んだ道は、まさにそういうものだった。

「俺は戦争を終わらせられるなら、それでも良かった。なんと言われようが、な」

「……ならなんで、こんな話をしてる。なんで、捕虜を解放するなんて言う」

「分からなくなったんだよ」

シャウラは空を仰いだ。

「俺は少尉に任官してから、与えられたこの千五百を徹底的に鍛えた。そこらの軍では太刀打ちできないくらいにな」

実際、シャウラの軍からは戦死者が他と比べてはるかに少なく、立てた軍功の数も並ではない。拡張は認められず、それを悔やむものも多かった。

たったの一年で彼の名は響き渡った。

味方からは『赤き獅子』として。敵からは『赤毛の悪魔』として。「すべて、戦争に勝つために。勝てれば、それでいいと思っていた」

「過去形、か」

「ああ。……先月、俺の親父が、病で死んだ」

「……？」

「俺が軍に入ったのは、そもそも両親の不安を除いてやるうって
いう、これだけだった。その親父が。死んだ」

「……だから何だ？ 親が死んだのが自分だけだとも思ったのか」
蔑んだ目を向ける。肉親がいなくなることなど、さして珍しいこ
とでもない。

まして彼は軍人だ。彼は他者の肉親を数え切れないほど殺してき
たのである。

「自分が哀れだなんて思ってるわけじゃない」

「だったら」

「おふくろが、俺に言ったんだよ。少尉に任官した俺の姿を、親
父に見せてやりたかったって」

シャウラは一度、言葉を切った。

「俺は、何のために戦ってきたんだろうか、って」

戦争の勝敗に関係なく、父は逝った。どれだけ功を立てようが、
どんなに昇格しようが。

「気付いたんだよ。結局、戦争に勝とうが負けようが、親父は死
んだ。病の原因はもともと親父の体の中にあつたらしくてな。いず
れこうなる運命だった、と」

だとすれば、自分がしてきたことはなんだったのか。

戦争を終わらせて、両親を安心させてやること。これだけが望み
だった。だからここまで、戦い抜いてきた。自分にとって、戦うこ
との意義はそこにしかなかった。

だが、不安を除いてやるのに一番いい方法は、本当に戦うことだ
ったのか。

母と話したとき感じた虚しさは、つまるところそういうことだ。
自分の望みは手柄を立てることや出世することなどではないのに。

何故自分は、戦うことしか思いつかなかったのか。

「本当は誰だって、分かっているはずだ」
もう一度、夜空を見上げた。

「戦争を肯定してる時点で、間違ってるんだって事に」
今更、こんな言い草が許されるはずもないが。

シャウラは立ち上がった、腰の剣を抜いた。

「どこかで分かっているながら、気付かない。……愚かだよ」

「……てめえが、言うのか。それを」

睨み上げて、少年は言う。暗くて顔は良く見えない。どんな表情を浮かべているのかも。

ただ、言う声は少し揺れているように思えた。

「すまない、と言っても、詮無い。少なくとも次に帰還するまで俺はこの生き方を通す」

「くそつたれが……。やめちまえばいいだろうが」

「今は、部下の命を預かっているからな」

シャウラは少年の裏手に回った。縛られている両手の縄を切断する。

「お前、名前は」

「……ルース」

立ち上がった少年に、目を向けた。やはり表情は見えない。

「あんたは、また人を殺すのか」

「……この仕事が終わるまでは、何も考えない」

自分が悩んでしまえば、危険になるのは部下の命だ。それだけは避けなければならない。

「考えれば、戦えない。だから何も考えない。……今は、それしかできない」

「なんで、あんたが……」

気付かなければ、こんな風に苦しんだりはしないのだろう。こんな風に、ためらう事も。

そして、どうあっても本国の貴族達はそれに気付かないのだ。血が流れるのが自分達から遠く離れた所である故に。流れる血が自分

のものでない故に。

だから戦争は終わらない。

「行け」

シャウラは剣を鞘に収めた。ルースに背中を向けて歩き出す。
ルースも闇の中を歩き出した。

夜の闇はいまだ、濃い。

二日後、先遣の部隊と合流した。思いのほか抵抗が激しく、三千五百いた部隊は二千にその数を減らしていた。合流して、三千五百になる。

指揮官は戦死した。そのため、全体の指揮はシャウラに任された。「敵は籠城していましたが、こちらを打ち破った勢いに乗って出てきています」

先遣隊の兵が報告する。現在は砦の前に布陣し、いつでも逃げ込める態勢を作っていた。

「厄介ですね」

ドーグがつぶやく。その目もとは引き締まっていた。

「一日で、あれを抜くぞ。攻囲をかけている暇はない」

物資はそれほど多くない。籠城されれば面倒なことになる。

「後方の統率に当たってくれ。俺はいつも通り、先頭で出る」

「わかりました」

ドーグが駆け去っていく。数人の兵がそれに続いた。

六百の騎馬隊の先頭は常にシャウラだ。

この任務を終わらせる。シャウラの頭の中にあるのはそれだけだった。

「行くぞ」

そう言つと彼は槍を携えて騎乗した。

整然と進んでいた軍の動きがあわただしくなってきた。六百の騎馬隊が先頭に集結し、後方の軍は小さくまとまった。

敵の軍は堅陣を敷いていた。兵力は五千ほど。後方に指揮官の姿があり、守りは堅そうに見える。

「あれでは崩すのは難しい。まして兵力的には劣勢です。少尉」隣を行く男が言う。彼は先遣隊の副指揮官を務めていた男で、階級はドーグと同じ曹長。

自分を先頭にと志願してきたのだ。

「そう思うなら、後ろに下がっている」

シャウラは取り合わなかった。ここへ来てそれを言うような者は、彼の部隊にはいない。

「これより先は、余計なことを口出しするな」

——余計なことは、何も考えない。

「行くぞ」

騎馬が猛然と駆け出した。速い。

矢が次々飛んできた。それにもかまわず、シャウラは隊を突っ込ませた。

かわしたり叩き落したりする技術は身につけている。そうでないにしても、矢を前にして躊躇していれば犠牲は増えるばかりだ。ぶつかってしまえば矢は使えない。

すぐに敵の先頭と、騎馬隊がぶつかった。

槍のように一直線になって、騎馬隊は駆ける。正面の敵をシャウラは槍で突き落とした。

すれ違いざまに、右から切りかかってくる敵騎兵を下から薙ぐ。長い槍は鞭のような動きを見せ、鮮やかに敵の首を飛ばした。シャウラの持っている槍は普通のものよりも刃が大きく、重い。破壊力は増すが、その代わりに扱いが難しくなる。それを彼は苦もなく使いこなしているのだ。

返り血を頭から浴びる。体のどこかがざわついた。叫び声をあげた。

触れるものが弾き飛ばされていくかのような、すさまじい勢いでシャウラは突っ込んでいく。

槍が縦横無尽に動き回り、敵兵の首を飛ばし、体を突き通していく。部下の騎兵もそれに続いた。

敵中を駆ける。あつと言う間に敵の集団が割れた。阻むことができないほど、激しい攻撃。

ここでいくら敵を追い散らしても、砦に逃げ込まればそれから攻囲をかける以外に手がなくなってしまう。そうなるこちらも長くは持たない。何よりも、犠牲が無駄に増える。敵も味方も。

指揮官の姿が見えた。思いがけない圧力に、動揺しているように見える。

シャウラは馬の腹を蹴った。勢いが増す。騎馬隊はひとつに固まって、まるでそれ自体が狩をする獣であるかのようだ。

敵は真つ二つに割れていた。騎馬隊が断ち割ったのだ。

突っ込んだ。あとすこし、というところで指揮官が背を向け、砦に向かって馬を走らせた。

鐘の音。それを合図に、断ち割られて動揺していた敵の集団が後退する姿勢を見せた。

シャウラは血まみれの槍を握り締めた。振りかぶり、投擲する。

大槍は空を走り、指揮官の首に突き刺さってそのまま抜けた。馬上に残った体が落ちる。

シャウラは腰の剣を抜き放った。

「回れ！叩くぞ！」

二つに割れた敵の片方に、ドーグの指揮する歩兵が打ちかかっていた。その一部が、騎馬隊のあけた大穴になだれ込んでいく。

敵を正面からつき破った騎馬隊は、砦の門の前に陣取ると、その門を塞ぐように展開した。

断ち割った敵の半分を、歩兵が取り囲む格好になった。敵は方向を失う。総崩れになった。

残った半分の敵が攻勢をかけようとしても、門の前の騎馬隊が牽制し、動きが取れない。

じりじりと時間が経過していく中、敵の数がみるみる減っていつ

た。

「徴兵？」

「ああ、そうだ」

いぶかしむルースにうなずいたのは、共に夜襲に加わった一人だった。ルースと同じ村の出身、夜襲を提案したのも彼だった。

夜襲の後で落ち合うと決めていた町の、酒場。

帰り着いたルースは迎え入れられるなり、ここに連れて来られた。
「ここらはもうお上も諦めちまったらしいがな。北の方では兵を徴発してるらしい」

「……」

「行こうぜ、ルース」

男の目は、どこか嬉しそうだった。

——何が、嬉しいのだろう。

「俺達には、もう矢うものなんかないんだ。戦争に負ければ、この国の人間が何をされるか分からねえぞ」

「……そうだな」

「俺達が、守るんだよ。この国を」

「守る、か」

彼も、国を守るために戦っているのか。そのために他者の命を奪う。他者の守るべき者の命を。

ルースは首を振った。どのみち、自分にはもう道などなかった。

「……行こうか」

4（後書き）

若干、前書きとは展開がずれてきたところがありますが、すみませ
ん、自分の構成力のなさのせいです。

冬の朝、砦の水汲み場に彼はいた。水桶を井戸の中に放り投げる。長く伸ばした赤い髪から、冷たい滴が次々に落ちる。朝日に反射してきらめいていた。

「……臭い」

血の臭いが、とれない。

このところ、こうして朝を迎えることが多くなった。悪夢になされて目を覚まし、部屋にいるのがひどく億劫になって外へ出て、気を紛らわすために槍の稽古を始めた。

そうしているうち、自分の体に血の臭いが染み付いているような気がしてきた。

そして、頭から身を切るような冷たい水を被っている。

血の臭いは落ちない。落ちている気がしない。

シャウラは砦を見上げた。ここを落とした戦闘からもう一年と半年が経つ。

彼はこの砦の守将を任された。結局あれから、本国には帰ることができなかった。

このあたりは完全にウエルスの勢力化に入った。とはいえ周辺では小競り合いが起ることも多く、彼自身が武器を取ることも珍しいことではない。

そしてそれが、苦痛でたまらない。それまで戦闘を苦痛だなどと思ひもしなかったのに。

皆が敵と称する者を槍で突くたび、剣で首を落とすたび、吐き気を催す。目を背けなくなる。しかし訓練された体は戦うのをやめない。体に染み付いた『生き残る』という意識が勝手に彼の体を動かすのだ。

だから彼は代わりに叫び声を上げる。そうしなければおかしくなりそうだった。

「少尉」

かけられた声に振り返る。立っていたのはグリム曹長だった。この砦を落とした戦場でシャウラに退くべきだと進言した男だ。今はドーグと共にシャウラの補佐役としてここに詰めている。

「ダストアから使者が来ています」

「……こんな朝早くにか」

ダストアは一年前の進軍の際、拠点のひとつとなった城塞都市だ。そこには本国の将軍が駐留していて、今でも命令系統の重要なポイントになっている。

「会議室に待たせてあります。ご足労願えますか」

慇懃な口調でグリムは淡々と言った。

「わかった。すぐに行く」

息は白かったが、寒さは感じなかった。

軍服に着替えて会議室のドアをくぐる。座っていた人物が立ち上がって敬礼した。

「ご苦労様です」

返礼すると彼は手を下ろした。少し太った小男だ。あまり軍人には見えなかった。

向かいの席に腰を下ろした。他に人はいない。

「将軍の下で諜報員をしています、ラッドと申します」

そう名乗った男は、シャウラに一通の手紙を手渡した。王国の印章の入った口ウで封がしてある。紙は高価だ。それだけに情報伝達の信頼性が高い。

封を開け、手紙を取り出す。読み進める彼に、ラッドは口を開いた。

「将軍からの通達です。いつになるかは分かりませんが、近々再び大規模な侵攻を開始します。少尉にも兵を出していただきます。それに備えて軍備の強化を。武器や兵糧は本国から順次出します」

「了解」

「詳細は決まり次第伝令を送ります。……それと」

使者は一度言葉を切った。

「敵国内で、内乱の兆しがある、という情報がありました」

「内乱？」

「はい、不確かな情報ですが。あまり信憑性はありません」

「だろうな」

ずいぶん前から間諜の動きが活発化している。どちらも、敵に掴ませるための情報を山ほど流しているのだ。あてになどならない。

そもそも、それはシャウラが考えることではない。

ラッドは席を立った。

「では、私は行きます」

「ああ」

歩き始めるその動作には、まるで気配を感じられなかった。

諜報員。そう名乗ったが、情報収集だけが仕事ではないだろう。もし自分と戦ったとしたら、果たして勝てるだろうか。何となくそんなことを考えた。

ドアノブにかけたラッドの手が、少し止まった。

「少尉」

振り返る。太った小男はこちらを見てはいなかった。

「……上層部は、『赤き獅子』の能力を高く買っています。ですが」

「……」

「往々にして、英雄は貴族に忌み嫌われてきたということ、心に留めておいて下さい」

「……英雄か、俺が」

自嘲気味の笑みを浮かべる。それを背に、諜報員は部屋を退出した。

石造りの廊下を歩きながら、ラッドはつぶやいた。

「私は、あなたを手にかけたくない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2316a/>

無垢なる憎悪 汚れた正義

2010年10月9日03時17分発行